

高津区地域包括ケアシステム講演会（キラリ事業）

主催 高津区役所

地域の居場所が 必要なワケ



報告書

令和6年3月

川崎市高津区

目次

1. 令和5年度たかつキラリ事業概要	1
(1) 令和5年度講演会の概要	1
(2) プログラム	1
2. 講演会の記録	2
(1) はじめに	2
(2) 講演	2
(3) パネルディスカッション	7
(4) 会場のみなさんと意見交換	14
(5) 終わりに	17
3. 参加者アンケート結果	18
4. 資料編	25
(1) 報告スライド	25
(2) 広報用チラシ	32
(3) 会場案内	33

1. 令和5年度たかつキラリ事業概要

(1) 令和5年度講演会の概要

開催日時：令和6年3月16日（土）14時～16時

開催場所：高津区役所1階保健ホール

テーマ：地域の居場所が必要なワケ

参加者数：48名

構成：

- ・基調講演とパネルディスカッション、会場との意見交換会の構成で行う。

基調講演：梶川 朋氏（野川のえんがわ こまち代表）による講演会

パネルディスカッション：区内で活動する2団体と梶川氏によるパネルディスカッション

＜団体＞菜の花ダイニング 佐藤由加里氏

フリースペースえん 友兼 大輔氏（NPO 法人フリースペースたまりば）

（2団体の事例紹介及び梶川氏を交えたトークセッションを行う。進行はコーディネータが行う）

会場との意見交換：会場の参加者から、梶川氏及び2団体への質疑

ハートリレー紹介：区役所からのハートリレー紹介

(2) プログラム

司会進行及びコーディネーター：社会空間研究所 中島

時間	内容	備考
14:00（5分）	（1）はじめに ①区役所あいさつ（趣旨説明・概要・講演者紹介等） ②本日のプログラム説明	①地域ケア推進課長 ②司会
14:05（50分）	（2）基調講演 ・梶川氏による基調講演	梶川朋氏
14:55（5分）	※休憩（この間にステージ配置変換）	
15:00（計40分）	（3）パネルディスカッション	
10分	①菜の花ダイニングの活動紹介	加藤由加里氏
10分	②フリースペースえんの活動紹介	友兼大輔氏
20分	③トークセッション	梶川氏、佐藤氏、友兼氏及び司会によるトークセッション
15:40（15分）	（4）会場のみんさんと意見交換	
15:55（5分）	（5）終わりに ・ハートリレー及び空き家利活用マッチング紹介	事務局
16:00	■閉会	

2. 講演会の記録

(1) はじめに

■高津区役所地域ケア推進課 大平課長あいさつ

本日の講演会については、周知期間が短かったためどのくらい参加者がいらっしゃるか心配であったが、今回、たくさん来ていただいて安心した。

「地域包括ケアシステム」とは、今後到来する少子高齢化社会に向けて、みなさんが住み慣れた地域で住み続けていられるように、自分のことは、自分でできるように、また、地域ともゆるくつながってお互いを支え合っていきましょうというものである。

一方で近年は、コロナ禍のため、人と人とのつながりがこれまでと変わってしまったところもある。このようななか、先日私どもは、狛江市にある「野川のえんがわ こまち」を訪ねた。訪ねた当日は雪であったが、こまちのスタッフに暖かく迎えていただき、雪の中でも小さな子どもが外で元気に遊んでいたり、高齢者の方がお部屋でゆっくり過ごしていたりして、居心地が良い空間であった。

本日の講演会の講師は、「野川のえんがわ こまち」の代表理事の梶川朋氏。パネリストに、「菜の花ダイニング」代表の佐藤由加里氏、「フリースペースたまりば」理事の友兼大輔氏をお招きして行った。



(2) 講演

■「野川のえんがわ こまち」の代表理事の梶川朋氏の講演

狛江市では、先日、「ゆめパのじかん」の上映を行い、そこで「フリースペースたまりば」理事長の西野博之さんに、子どもの居場所の必要性について、話していただいたところである。

狛江市は全国で2番目に小さなまちであるが、地域活動が盛んであり顔の見える関係づくりに関わる活



動を行っている。狛江市の人口は、8万人くらいでこれまで増加していたが、この2年くらいで減少に転じた。

私たちこまちは、狛江市で仲間7人で活動を始めた。こまちという名前であるが、「こまえをつなぎ、だれもがともにあゆむまちづくり」を願って付けたものである。この場所は、もともと私の祖父母の自宅であったが、ふたりとも亡くなり空き家になっていた。その家を活用したものである。こまちの主な活動は、多世代の誰もがいつでもふらりと立ち寄ることができる居場所の提供である。私たちはまちの縁側と呼んで、このような居場所をつくっている。もう1つ活動があり、15分300円の有償ボランティアで、こまちアと呼んでいる。ご自宅に伺って、困りごとのお手伝いをするという取組である。野川のえんがわこまちは週4日開けていて、月に400名程度の人が利用している。こまちアの方は、毎月150件程度の依頼に対応している。



地域のなかに世代や背景を問わず、誰でも集える場所があること、また、世代や背景を問わず利用できるサービスがあること、そうした活動を通して誰もが共に生きることができる地域づくりに貢献したいということが、こまちの活動の根っこであると思っている。

そのなかで、こまちは3つのビジョンを掲げて活動している。

1つめは、年代や属性に関わらず誰もが助け合いながら、自分らしく生きられるまちになってほしいということ。2つめは、多様な居場所に満ちたまちになってほしいということ。地域に小さくても良いので、多様な居場所が点在するまちになってほしい、ひとりひとりが自分の肌にあった居場所を見つけられるまちになってほしい。3つめは、誰にも活躍の場があるまちになってほしいということである。

私のことを話すが、私は父の仕事の都合で幼少期を海外で過ごしたが、帰国後、日本の小学校に通ったがなじめなかった。その後、父が病気になり介護をしなければならない時期が続いたことで、不登校になってしまった。通信制の高校に進んだため、社会のルールから外れてしまったと強く感じてしまった。幸いなことに大学には行かせてもらったのだが、このことから、どんな背景があっても、どんな経験があっても生きづらくない社会ってなんだろう、どうやったらつくれるんだろうと考えた。そのようななかで、富山県で富山型デイサービスというものがあることを知った。1つ屋根のしたで、赤ちゃんから高齢者まで誰でも受け入れることを目指している場所である。これが私に1つの道筋を示してくれて、富山にしばらく通った。自分も東京でこのような場所をつくりたいなということ考えた。しかし、東京ですぐにそのようなところが見つ

るわけでもなく、少し福祉の勉強をしたいということもあったので、大学卒業後すぐに障がい者の入所施設で勤務した。その間に祖父母が他界し、祖父母の家をどうしようかということをお親族で話し合い、居場所づくりに使わせてもらうことになった。

当時の家は祖父母の荷物がたくさんあったので、これを親族や仲間で片づけることから始めた。家は古い物件だったので耐震基準に満たないものであった。耐震補強を市の助成金を使って行った。庭にはブロック塀と駐車場に鉄の門扉があったが、誰もがふらっと入れるようにと、これらを外した。このように準備を重ねていたが、2019年、新型コロナウイルスの感染が広がり、当初は2020年の4月にオープン予定であったが、新型コロナウイルスは人と人が触れ合うことで拡大してしまうものなので、オープンできなかった。オープンは、緊急事態宣言が解除された6月となった。解除されても当時はなかなか人が集まらない状況であったので、当初の利用者は3人程度であった。

新型コロナウイルスが5類に移行したこともあり、最近ではいろいろな人が来ている。ファミリーサポートセンターの制度を活用した、スタッフによるお子さんの預かりも行っている。利用者は、乳幼児親子や小中学生が多い。また、不登校の子ども達も利用している。先日テレビに取材してもらったので、それを見ていただきたい。

(動画)

この他に季節のイベントなども開催している。こまちの特徴としては、学年や世代、学校に行っている行っていないに関わらず一緒に遊ぶということである。一般的な学童などとはちょっと違う。近所の公園にみんなで遊びに行ったりもしている。週2回、学習支援の時間もある。こまちが閉まっている時間に、勉強のためのスペースとして活用もできる。勉強だけではなく興味や関心があることを深めることができるようにしている。学校に行っている子どもが普段あまり学校に行っていない子どもに勉強を教えるなど、交流をつくっている。さまざまな障害を持っている人も来て、直接的に交流をしていなくても、同じ屋根の下で一緒に過ごして存在を感じ合うことが、多世代交流になると思う。

毎週水曜日は参加者みんなと一緒に昼食を食べ、それを「こまち食堂」と呼んでいる。生後2か月の乳幼児から90歳の高齢者が一緒に昼食を食べ、この時がもっとも多世代交流になっていると思う。その他にも、月に1回、子ども食堂をやっている。子ども食堂では、参加した子どもたちが厨房に入って料理を手伝ったりしている。その他に本の読み聞かせ、助産師さんの広場をやったりしている。

訪問型の支え合いサービスの「こまちア」や市の委託を受けて訪問型サービスBを行っている。介護保険のサービスとまでは行かないが、生活支援を受けたい人から依頼を受けている。

そして、今日のテーマの「地域の居場所が必要なワケ」であるが、第1の居場所が「家庭」、第2の居場所が「会社や学校」と言われており、人によって性格が違う役割を持つ場所として、第3の居場所がある。この第3の居場所が、学校に通っている子どもが学校とは違う顔を見せる場であったり、引きこもりの子どもと暮らしているお母さんが、お子さんから少し離れることができたりする。リラックスしたり、エネルギーを貯めて翌日からがんばったりする居場所になればいいと思っている。不登校のお子さんでいうと、不登校の時は毎日来ていたが、学校に行くようになってから来なくなったりというように、第3の居場所とは止まり木的に利用されると良い。そうした社会との接点の中間としての意味合いもあると思う。このように受容的な空間と社会的な空間である第3の居場所について、早稲田大学の阿比留先生という方が次のようにまとめている。「それらは反対のようで、居場所の持ち合わせる両面である」。このように居場所は自分らしく、ホッとできる場所である。ここで子どもに焦点を絞ってみるが、狛江市では昨年度子ども市民調査を行っていて、今の子どもはどのようなところを居場所と考えるかという設問から、子どもたちにとって第1の居場所は家庭であることがわかった。次いで学校が第2の居場所となっていた。逆にみると、3割くらいの子もたちが家庭を居場所とは感じられていなくて、7割くらいが学校を居場所と感じられていないことがわかる。子どもは居場所を自分で選ぶことができないので、そこに関わる大人たちが、子どもたちにとって居心地の良い居場所をつくる必要がある。併せて、子どもが選ぶことができる第3の居場所が必要になる。そこで第3の居場所はどんなところがあるのかと聞いたところ、友達の家が16%、親戚の家が13%、部活動や塾、習い事、公園、図書館、地域センターが10%程度となっている。こまちを含めたプレーパークや地域の居場所は、2.6%であった。そして、5%が居場所がない・わからないということであった。

川崎市でも同じような調査を行っていて、第1の居場所として最も多かったのが自宅であった。次いで教室が多かった。狛江市とほぼ同じ傾向である。次いで、祖父母の家、友達の家、学習塾・習い事、こども文化センター、遊戯施設と続く。さすが川崎市であるが、子ども夢パークは1.5%。ただこれは広い川崎市全体なので、高津区に絞ればもっと高くなると思う。

このように狛江市と川崎市の状況をみたが、3人に1人が家庭を居場所と感じていない、4人に3人が学校を居場所と感じられていないことがわかる。第1の居場所である家庭と、第2の居場所である学校が変わっていくことも大事であるが、子どもが選べる第3の居場所の必要性も高いと思う。そしてそれを自分で選ぶためには、身近なところに様々な居場所がある必要がある。自分に合った居場所、その時の気持ちに合った居場所が選べると良い。このため、小さくて構わないので、身近な範囲にいくつもあって、ひとりひとりが肌にあった居場所を見つけられるようにする必要がある。

居場所のポイント2つめとしては、誰かと出会ってつながって、頼れる人を見つけられることである。先ほど地域の居場所は受容的空間と合わせて社会的空間であると言いましたが、それにあたる部分かなと思う。

地域の居場所は、身近なところに複数あること、そこにこの人なら頼ってよいかと思える人がいることだと思う。

東京大学の熊谷晋一郎先生の言葉で、「人が自立するということは、誰にも依存しないで頼らないで生きていくのではなく、頼れる先を増やしていくこと」とあるが、私たちが人として成長し自立していくことの方を変えていかないといけない部分であると思う。

内閣府の「子ども・若者の意識に関する調査」でも、安心できる居場所が多い子どもほど、自己肯定感や幸福感が高いとされている。先ほどの頼れる先が多いほど、人は自立へ向かうということの裏付けになっていると思う。ここまで、子ども中心の話をしてきましたが、大人でも同じことが言える。

子どもの居場所としては、次のように分類されると思う。1つは、ユニバーサルな居場所であること。すべての子ども、若者に開かれた場所であること。児童館、公民館、図書館、公園、プレーパークなど、いつでもだれでも行ける場所がある。もう1つはターゲット型の居場所。障害を持つ子どもの放課後デイサービスや、特定のニーズを抱えた子ども・若者の居場所など、共通のニーズを持つ人を集めて、効果的に支援する場所、似た背景を持つ人が集まることにより、安心できる場所ということになると思う。また、その中間で混在型と呼ばれているものがあって、私たちが運営してる「野川のえんがわ こまち」もこれに含まれる。基本的には誰でも広く受け入れる居場所であり、必要に応じて個別のニーズに対応したり、特定の対象者に対応したりしている。このように、地域の居場所とは多様な形があることが必要だと思う。そのためにしっかりした箱モノも大事だと思うが、居場所の多様性を生み出すためには、私たち市民による手作りの小さな居場所がたくさんあると良いのではないかな。私が4年間活動して一番うれしかったのは、こまちで出会った不登校の親御さん同士が、近くの公共施設を借りて月に2回、不登校の子どもを含め様々な人たちの居場所をつくりはじめたことである。手作りの居場所を知ること、利用することで、自分たちができることは何だろうと考え、そこから居場所づくりが始まるということである。思い返せば、私もいろいろなところに関わって、こまちを始めようと思った。いろいろなところを利用して、自分でも居場所づくりをはじめようかなと思う人が少しでも増えると良い。地域の居場所が増えるためにも、本日いらっしまったみなさんがこの講演会に参加して自分たちの居場所を立ち上げようと思うきっかけになれば良いと思う。

(3) パネルディスカッション

①活動紹介

■菜の花ダイニング 佐藤由加里氏

私の簡単な自己紹介であるが、趣味は書道やフライフィッシングである。高津区住民歴が約 15 年程度。私がボランティア活動に興味を持ったのは、東日本大震災である。それまで私には子どもがいない、両親も他界しているので、私が受けた恩を誰にも返せないと思っていた。そのような頃にこども食堂と出会って活動を始め、今に至っている。最初は月に 1 回程度お手伝いに行ければ良いと思っていたが、いつの間にか今のような活動を行うようになった。



菜の花ダイニング自体は、2017 年5月にスタートした。川崎市の中間支援組織であるかわさきこども食堂ネットワークや、神奈川こども食堂・地域食堂ネットワークの世話人もやっている。

「こども食堂」の定義は厚生労働省から示されていて、「子どもが一人でも安心して無料もしくは低額で食事ができる場所」となっている。誰もが行って良い場所である。私たちは、「こしょく」をなくそうということをモットーに活動している。私たちは「こしょく」をひらがなにしているが、当時、ひとりで食べる孤食だけでなく、偏食や少しのものしか食べない小食など、いろいろな「こしょく」が出てきた。これらすべての「こしょく」を何とかしたいということから、ひらがなとしている。

全国にこども食堂は、約 9,136 か所あるらしい。神奈川県には約 486 か所である。全国で 4 番目くらいの箇所数で、神奈川県が多いのは人口等によるものが大きいと思われる。川崎市内には約 83 か所、高津区内には約 10 か所である。すべてに“約”がついているのは、こども食堂は届け出が不要で任意団体でもできるので、正確な数が把握できないのである。

こども食堂の種類であるが、子どもが中心なんだからこども食堂ということであったが、地域の人なら誰でも来てほしい、貧困対策のこども食堂とは違うというところがあったり、うちは年齢に関係なく集まってほしいとか、いろいろな考えもあるので、ひらがなで「こども食堂」としている。こども食堂は、主催している団体によって目的が違って、川崎市には 83 種類のこども食堂があると考えて良いと思う。また、ボランティアの新たな活躍の場である。

どんな人がやっているかというと、地域の方、NPO 法人、飲食店の方などさまざまである。最近では企業が CSR の一環でやっているところもある。場所は、市民館などの公共施設、飲食店舗、教会・お寺、コミュニティカフェなどさまざまである。

連携先であるが、高津区だったら地域みまもり支援センターなどである。たまにであるが、利用者である子どもや家族にちょっと気になるところがある場合に連絡し、見守ってもらう。そのほかに、かわさき市民活動センター、これは運営費に充てるための助成金に関わるものである。こども文化センターなどには、広報紙を置いてもらったりしている。

どのように運営しているかというと、高校生や大学生が学校でボランティアの単位取得があり、その受け入れを行っている。高校生や大学生だと年齢も近いので一緒に遊んだり、勉強をみてもらったりするので良い。また、特定の資格を持っていないとできないということではないのだが、食に関わる資格を持っている人、保育士など子どもの関わる資格を持っている人などが多く参加してくれる。経費は助成金、寄付金、参加費で賄われている。参加費は子ども 100 円、大人 300 円あたりが多いらしい。菜の花ダイニングでは、原則毎月第 3 水曜日の 17 時 30 分～20 時にプラザ橘で開催している。最近は利用者数が多いので、事前申し込み制としている。

最近、川崎市のコミュニティ施策で「まちのひろば」があるが、菜の花ダイニングはそれにもなっている。

こども食堂の良いところは、誰でも来られるところ。子ども会などだったら、その地域に住んでいる子どもしか来られないし、部活だったらその学校に通う子どもしか来られない。こども食堂は地域などに限定されないことが良いところである。また居場所として良いところとしては、居心地が良いこと。私はこども食堂のことを新しい大人の部活動だと思っていて、そこで一緒にわいわいがやがやとご飯を作っている人は、顔と名前がわかる関係性で、ちょっと前までサザエさんやちびまる子ちゃんの世界で、町内歩いていると悪さをする子も良い子も顔と名前がわかっている。あそこの家は、お母さんが帰ってくるのが遅いことがわかっている、お母さんが帰ってくるまで面倒をみるなどが行われてきた。しかし現在は、マンションが増え、転入転居する人が増えてくると、名前がわからない人も増え、クレヨンしんちゃんみたいな世界になっているので、こども食堂という名前をつけないと、みんなが居られないのではないかと感じている。

■NPO法人フリースペースたまりば 友兼大輔氏

NPO 法人フリースペースたまりばは、1993 年に高津区二子新地からはじまった。法人化したのは 2003 年である。NPO 法人フリースペースたまりばは、子どもの居場所、こども食堂、学習支援など、いろいろなことに取組んでいる。今日は、夢パークやフリースペースえんをもとにして、子どもの居場所についてお話ししたいと思う。



夢パークは 2003 年にオープンして、昨年 20 周年を迎えた。全国ではじめて子どもの権利条例をつくったのが川崎市で、それが 2000 年であり、その 3 年後に川崎市子ども権利条例を具現化する施設としてオープンした。

フリースペースえんは、不登校の子どもの居場所である。ちなみに数年後には「不登校」という言葉が無くなるということで、フリースペースえんも「多様な学びの場」となる。

基本的には、「生きているだけで祝福される場」をつくること。誰かが誰かのためにつくるのではなくて、お互い様、相互尊重の居場所をつくろうよということが理念である。今日の講演会では、共通の内容として食の話が上がっているが、フリースペースえんでも、毎日の昼食をみんな考えて、みんなで作って、みんなで食べる。やはり食は大事だと思う。

まず 10 時 30 分ごろから、子どもたちと一緒に今日のお昼は何を食べるかを考える。材料は、こども食堂ネットワークや、フードロス問題に意識がある企業等に提供されたものとか、夢パークにある畑で収穫したものなどでつくる。

メニューを決めることは大事だと思っていて、朝にメニューと一緒に考えることで、子どもたちひとりひとりの体調を確認できたり、寄り添えることができると思う。ただ、みんなで決めるため、昼食を食べる時間は遅くなる。だいたい 13 時半くらいになってしまう。

フリースペースえんでは、カリキュラムといったものはない。子どもがその時にやりたいこと、必要だと思ったことをやる。何歳だからこの勉強をしなくてはならないというカリキュラムはない。スライド写真の中に白髪の男性がいるが、この人は元々理科の先生である。もう 30 年くらい関わってくれていて、科学を教えてくれる。この人に「学かって何か？」と聞いたことがあるのだが、「出会いをものにする力だと思う」と仰っていた。フリースペースえんは、その出会いができる場であることが大事だと思っている。またその人に「出会いをものにする力」とは何かと伺った。そうしたら、「その人自身の経験ではないか」と仰った。その時に思ったのが、そもそも「私が生きている自体が学び」ということである。感性が育てられて出会い、それをものにしていくということが大事な事だと思う。

このスライドは、オンラインでインドネシアの子どもたちとつないだもので、インドネシアの子どもたちと児童労働について意見交換を行っているところである。次のスライドは、アフリカの人からパーカッションを教えてもらっているところである。このアフリカの人は日本に来て劇団四季でパーカッションを演奏していた。私たちはこのように本物と出会える機会をつくることが勝負だと思っている。

日常的に「いい子」にならなくて良い。私たちが関わる大人には、「いい子」という言葉を使わないでくださいと言っている。「いい子」とは、大人にとって都合が良い子のことである。それが評価基準になってしまっはいけないので、大人はそこを肝に銘じてほしいと思う。

夢パークとは学校が終わって遊びに来る子どもと、不登校の子どもが一緒にいる場である。何かをしなくてはいけない場ではなく、何かをしたいから来る場である。そういう場が大事ではないかと思っている。それが居場所・サードプレイスになると思う。サードプレイスとは大人もそうだが、自分の好きなことでつながる場である。このような場をつくるのは、我々スタッフだけではできないし、行政が入るだけではなかなか難しい。やはり地域の人々の参加が必要で、地域の人々が自分の得意なことを少しずつ提供してくれることで、子どもたちがいろいろなことができる場になる。教えてあげるのではなく、「一緒に過ごす私の得意分野で」ということが大事だと思う。

そして、私たちフリースペースたまりばが大事にしているのは、「子どもの命を真ん中に据える」「子どもの最善の利益を考える」である。何かを考える、何かをはじめるときに悩んだときは、「子どもの命を真ん中に据える」「子どもの最善の利益を考える」をまず最初に考えることを大事にしている。

②トークセッション

(司会)

佐藤さんにお伺いしますが、実は食事を作るほうの方たちの居場所になってもいるというお話で、そこに感銘を受けました。このように、運営側も利用者側も一緒に楽しい居場所になるための秘訣やポイントのようなものはあるのか。



(佐藤氏)

答えを端的に申すと、私は何もやっていないということである。私は場を提供するだけである。こども食堂なので料理をつくるわけだが、料理をつくるにあたって大まかな手順書を作って貼っているだけである。そうするとボランティアさんみんなでわいわい会話しながらつくるのである。それが楽しいのかなと思う。

(司会)

続いて、友兼さんに伺いますが、フリースペースえんは多様なプログラムが行われていて、そこにいろいろな人たちの技術や特技が活かされている。また、フリースペースえんの運営にもたくさんボランティアが関わっている。このように、いろいろな人を巻き込んで、そのみなさんの持っている技術や特技を無理なく提供してもらっていると思うが、このような環境になるために、たまりばとして意識してきたことや、コツなどがあれば教えてほしい。

(友兼氏)

私たちが思う人と人がつながるときとは、弱さでつながるんだと思う。ひとりで全部できるのであれば、他人とつながる必要はない。できないことがあるから、相互補完の関係でつながるんだと思う。このため、「ここができないんだ」としっかり伝えることが大事だと思う。

(梶川氏)

佐藤さんにお伺いします。ご自身のお話のなかで、両親からいただいたご恩をどう返すのかというお話があった。誰かのために何かをしたいということも大事だが、自分がここにすることへのありがたさ、自分の生き方としてそれをどう返せるのか、自分が何ができるのかということが根っこにある気がした。そのあたりの想いのところをもう少し伺いたい。



(佐藤氏)

私の両親は早くに他界したのであるが、両親からいただいた恩を返したいと強く思ったのが、東日本大震災の時である。結局、こども食堂って私ひとりではできない。こども食堂を開くと来たいという人がいて、私の自己満足を叶えてくれるのではないかと感じる。

結局は、自分のやりたい、やってみたかったことを実現させてもらえる場、それが新たな居場所であって、自分にとってもサードプレイスであった。だから活動を続けられるんじゃないかなと思う。

みなさんも何かやってみたいと思ったら、どこかちょっと覗いてみたらいかかかなと思う。



(梶川氏)

続けて友兼さんに伺いたいですが、お話のなかにフリースペースえんではカリキュラムがなくて、子どもたちが自分で生活をつくっていくということを大事にしているということであった。自分で生活をつくるって難しいと思うが、そのために、どんな工夫とか意識して関わっているのか伺いたい。

(友兼氏)

先ほど話したなかで、「いい子」という言葉を使わないでと述べたが、世間の評価を持ち込まないようにしている。あと、排除はしない。例えば、子どもたち同士でけんかをしていたとする。けんか自体は良いのだが、その中で「お前来るな」とか、「消えろ」とか、相手の存在を認めないことを言わないように伝える。



また、フリースペースえんや夢パークには、学生の実習生がよく来るのだが、学生は用意されているカリキュラムに沿って、やることが決められて勉強してきている。しかし、フリースペースえんや夢パークの実習では、指示しないし、好きなことをやってと伝えている。そうすると学生は動けなくなる。これは学生だけでなく、普通の大人も同じだと思う。しかし、フリースペースえんに来る子どもたちは、用意されたカリキュラムもないし、好きなことができるし、そのようななかで自分の生活を組み立てている。

フリースペースえんでは、さまざまなプログラムも準備しているのだが、それらに誘うときは、参加しない権利を保障したうえで声をかける。参加しないからと言って何かあるわけではない。

実は、発達障害の子どもが良い雰囲気をつくる。そのような子どもはいわゆる「空気」が読めないで、状況に関係なく誘う。このため、これが良い相乗効果になる。大人がどぎまぎしているときに、その空気を壊してくれるのはやはり子どもである。

（梶川氏）

こまちにも不登校の子どもが来ているが、フリースペースえんと同じように、「今日はどう過ごす？」と一緒に考えている。大人でも自分で生活を組み立てるのは難しいので、友兼さんのお話を伺って勉強になった。

それと、けんかしても良いけど、相手の存在を否定しないことを大人が伝えること、本物の出会いを大人が提供すること、そうすると子どもが勝手に成長するのではないかということが勉強になった。

（友兼氏）

やはり、大人が楽しまないといけない。私がこのような講演会の最後に必ず伝えることなのだが、川崎市子ども権利条例をつくった時の子ども部会からの提言があったのだが、「子どもが幸せになるためにも、まずは大人が幸せになってください」ということだった。大人が楽しむ・充実することが大事なんだと思う。

私からも質問があるのだが、こまちを利用する際に、ふらっと誰でも行けるのか。不登校の子どもの場合は登録なのか。

（梶川氏）

利用者がはじめて来たときに、登録用紙みたいなものを書いてもらう。ふらっと来て、その場で書いてすぐに利用できるようにしている。狛江の児童館などでは、子どもは登録用紙を家にいったん持ち帰って、親御さんに書いてもらってから提出してもらうようだが、こまちでは子ども同士でも来られるように、その場で書いてもらい預かる。その理由は、家庭にどんな事情がある子どもでも来られるようにするためである。

(4) 会場みなさんと意見交換

(会場から)

梶川さんの活動に感銘した。私は、地元で民生委員児童委員をやっているのだが、こまちについては子どもの利用の状況は分かったのだが、高齢者の利用はどうなっているのか。



(梶川氏)

高齢者は利用者全体の1割程度である。特に水曜日のこまち食堂に来ていただく方が多い。このような場での会話の中で、こんなことで困っているんだよとつぶやいてもらえるような環境になると良いと思う。こまちアで依頼され訪問した時にも、こまち食堂などにお誘いしている。

(会場から)

私は大学生で地域コミュニティづくりについて勉強していて、このような居場所づくりに関わりたいと思っている。しかし、卒業し会社に勤めるようになったら、なかなかこのような場に寄りつづけることは難しいと思っている。そのあたりはどうか。

(佐藤氏)

そのような人はたくさんいる。こども食堂は夕方やってるのだが、食事が終わってからの洗い物だけやってくれる人がいる。

(友兼氏)

私たちは、フリースペースたまりばの職員として働いているが、夢パークもフリースペースえんも、イベントの手伝いや、夕方だけ来て片付けだけ手伝ってくれる人もいます。実は、今回の司会の中島さんは、ボランティアで夢パーク支援委員会の委員長をやっている方で、普段から夢パークと一緒に活動している。夢パークは市民と一緒に運営やプロジェクトを進めるものなので、中島さんも普段は働きながら一緒に関わってくれている。実は今日も、この後夢パークで会議があり、中島さんはその会議に出席する。このように社会人になっても、いろいろな関わり方がある。

(司会)

コツは空き時間にやること。空いている時間に夢パークに足を運ぶこと。それと合わせて今は、インターネットを活用し、離れたところからでも意見交換ができる。社会人になっても空き時間はいくらでもできるので、その時間を活用して関わることはできる。

そして、住みやすいまちづくりを進めるために、仕事しながらでも居場所づくりに関わろうという人が増えることが大事だと思う。

(友兼氏)

こまちは、メインの職員と副業で関わる職員とがいるのか。

(梶川氏)

その通りである。7名のスタッフのうち、3名はこまちを主に関わっている。4名が他に仕事を持ちながら副業またはボランティアとしてこまちに関わっている。

ボランティアとは、学生時代やリタイヤしてからでないといけないというイメージがあるが、他で本業を持ちながらでも、居場所づくりに関われるということを見せていきたいと思ってる。

(佐藤氏)

ボランティアなので、できるときにできることを、できるだけやれば良いと思う。あなたが、事務ワークが得意であれば、それを手伝ってあげれば良い。ちなみに、このような市民活動をしている人は、事務処理が苦手な人が多い。そこをやってくれると助かる。

(会場から)

今の話を伺って、私も社会人になっても参加したいと思った。

(会場から)

私は町内会役員をやっているが、高齢化が高い地域で高齢者の居場所づくりに取り組みたいと思っているところである。

フリースペースえんの話を知って、お昼のメニューを朝から考えて、13時半ごろに食べるという話があったが、これは子どもの育ちに非常に必要なことだと感じた。子どもたちには、待ち時間が必要だと思う。そういう経験を積むことによって、試行錯誤する力がつくように思える。私は、高齢者向けに「たかつのえんがわ」をやっているが、出てくるのは役員だけである。本来必要な人が出てこない。どんな仕掛けがあったら良いのか、良いヒントがあれば伺いたい。やはり、子どもと関わる方が楽しいと思う。



(友兼氏)

ちょっと違う角度からだが、夢パークを映画にした「ゆめパのじかん」があるのだが、「じかん」をあえてひらがなにしている。大人が使う「時間」とは、効率性や計画性が求められる。子どもは、先ではなく「今」を生きているものだと思う。そういう意味で、子どもと高齢者は、「じかん」において親和性があるのではないか。目的をもって日々を過ごすのではなく、「今」を一緒に過ごすことが可能ではないか。近くに幼稚園があるということなので、幼稚園とコラボしてみるとか考えられるのではないか。高齢者が子どもに何かを教えるところではなく、一緒に楽しむ空間ができると良い。

(佐藤氏)

私がこども食堂をつくったときに言われたのは、「やらねばならないことがない」ということだった。イベントとかでも成功したイメージができていて、それ以外はだめだということになると画一化されたものになると思った。

私は昔、地元のこども会のお手伝いをしていたのだが、年間の行事が全部決まっていて、新しいことは一切しない。何か提案すると、やるんだったらやれば良いよ、そんなことやれる人いないからと言われた。それで私は、ここにいるのは違うかなと感じた。

(梶川氏)

友兼さんが仰ったように、子どもと高齢者は親和性が高いと思う。その1例として先ほどの講演のなかで紹介した「富山型のデイサービス」である。高齢者のデイサービスと保育所を一緒にやっている。デイサービスを利用している高齢者が、保育で預かっている子どもをあやしたり、

遊んだりしている。そういう相互作用が大事だなと思っていて、こまちでも水曜日のこまち食堂で、最初は食事だけしていた認知症の高齢者が来ているのだが、最近は子どもと一緒に遊ぶようになり、今まで見たことない笑顔を見せた。その人は元々音楽の先生だったらしいが、子どもたちと一緒に音楽を楽しむようになった。この他にも元々喫茶店のマスターだった認知症の高齢者が、おいしいコーヒーを淹れにきてくれたりする。このように、地域のその人なりの役割でできると良いと思う。

(司会)

最後にまとめてみたいと思う。梶川さんのお話にあったように居場所を自分で選べる、選択肢が多いことが必要である。身近な場所にいろいろな居場所があることが大事である。このため、居場所づくりの活動に興味がある人は、どんどん居場所づくりに関わると良い。

その居場所に関しては、本物の出会いがあること、利用者と運営者の間で分け隔てがないこと、要するに、利用者も運営に参加できたり、運営者も自分の居場所だったりすることが大事。

あと、まずは自分が楽しむということ、それとやりたいことがやってみる、それをやれるところが居場所ではないかと思う。

そして最後に、社会人になってもこのような活動に関わることができるので、頑張ってください。



(5) 終わりに

※最後に、事務局からハートリレーの紹介及び、川崎市空き家利活用マッチング制度の紹介。

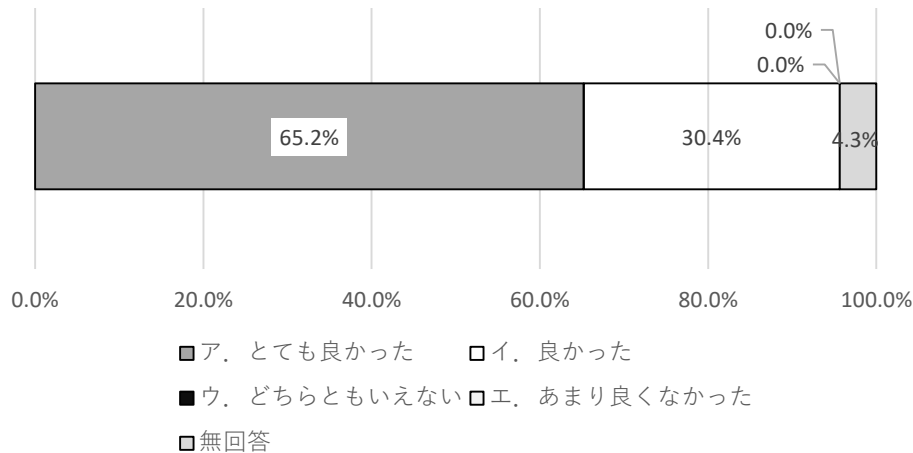
3. 参加者アンケート結果

実施：令和6年3月16日（土） 回答者数：46人

①本日の講演会に参加して、どのような感想をもちましたか。

1) 「2. 講演」について

ア. とても良かった イ. 良かった ウ. どちらともいえない エ. あまり良くなかった



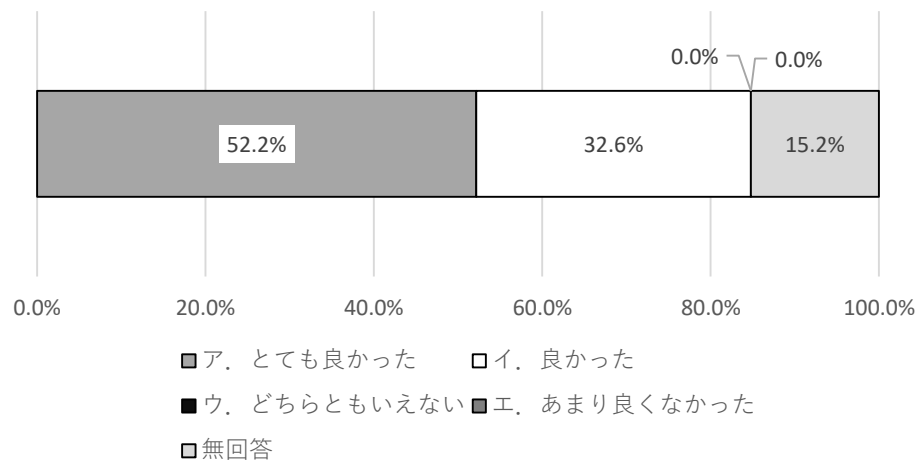
※理由をお書きください

- 若いグループの発想を形にできたこと。地域環境かな？
- 幼少期の経験が活動の原動力になっている
- 居場所について知ることができた
- 子ども夢パークのしくみ役目がわかった。不登校の子供が多いので勉強になった。
- 現場での話が聞けてとてもよかった。
- 誰でも利用できる場所がある事は大事なことだと思いました
- TV等で情報はあったが、たちあげた時の思いとか。
- 地域の居場所と聞いたとき、高齢者が頭に浮かびましたが、子供の居場所ということが、知る事が出来てよかった。
- ocomachでの取り組みがとても温かく、すてきだなと思いました。多くの人にとってのよりどころであることを願いつつお話を聞いていました。
- あまり知らない話だったので
- 民間でこのような幅広い活動ができていることに感動しました。
- 人の（子ども、大人、シニア）居場所について
- 「居場所」という意味がとても良くわかった。自分が生かされる場として（大切にしたい）？
- おだやかな語りでわかりやすかったですし、すばらしい居場所だと思った
- なかなか聞けない話し。簡単に近所の方とお茶飲みをしてもっと広げてとは思いますが、1人では無理と最初からあきらめている
- 具体的な活動内容がわかった。こまちさんの例はとても参考になります。
- 「居場所」についての定義づけから、実際の取組まで資料を使って丁寧に説明していただいたため
- ベースの考え方、捉え方、理解の仕方etc細かなことが吸収できた

○ありのままの話がきけておもしろかったです。
 ○ヒントになる話がたくさんありました。
 ○居場所作り、子どもにとってとてもほしい場所であると思います。支えあいサービスとても気になります。高齢者に必要です。
 ○民生委員児童委員として高齢者と児童の居場所作りを考えているため
 ○中身までは見たことがなかったので詳しく知れて良かった。
 ○関心あるテーマにあった内容であった為
 ○講演者の3名の熱意が伝わってきた
 ○身近なところに「居場所」がある事を知る事ができた
 ○居場所づくりについて丁寧に教えていただいた
 ○立ち上げ時のご苦労の事をととてもわかりやすくご説明下さり、思いがけずのコロナの時期とぶつかっても、負けずに実行→工夫？本当に感心する事ばかりでとても参考になりました。ひとりひとりの手で地域に手づくりの小さな居場所をふやしていきましょう。との言葉を頂き、梶川様のおやさしさにあふれたお話に感激いたしました。

2) 「3. パネルディスカッション」について

ア. とても良かった イ. 良かった ウ. どちらともいえない エ. あまり良くなかった



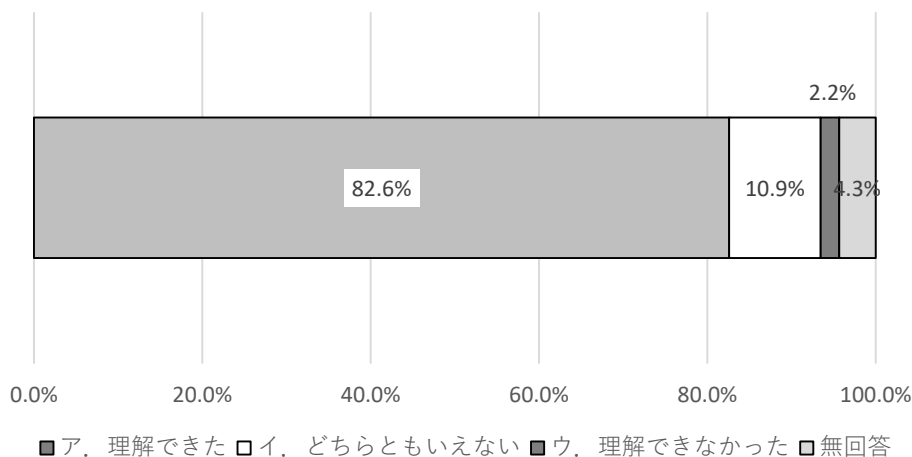
※理由をお書きください

○とても簡単でとても難しいことである
 ○わかりやすかった
 ○子供食堂を楽しくやっている様子が少しわかった。
 ○子供に寄り添った活動は素晴らしいと思いました。
 ○子どもに対応する姿勢をお聞きして感動しました。
 ○子供を通して「生きる」ということを考えさせられ、自分はどうすればいいのかなと考えることを教えてもらいました。
 ○多様性、多くの人を受け入れる場には、柔軟性が必要だなと感じました。
 ○課題認識はどの活動でも同じと分かり安心しました。
 ○実際に運営するにあたっての費用や問題点なども聞きたかった。それぞれ居場所の考え方を聞いたのはとても良かったです。
 ○集まれる場所を持っている会に属しているので、生かしたい思いがはっきりした
 ○佐藤さんがパキパキしていてすごく良かったです。刺激になりました。
 ○いろんなタイプの活動だが、目指す方向が同じなのがよかった。

- 活動について資料を使って丁寧に説明していただいたため、取組みをする上での考え方が学べた。
- 高齢者の方々の居場所を考えています。ヒント？あったかな？
- グラフは小さくてわかりづらいですね。
- 大人、自分が楽しむことが大事。印象に残りました。
- お互いの活動の疑問点を話すことで、聴いている側の疑問が理解につなぐことができた
- わかりやすく見られました。
- わかりやすく見られました。実体験をお話しいただくことができ参考になった。
- より深く知ることができました。
- 食事のメニューを決めて、食べるまで時間がかかっていますが、これが出会いで、これをものにする機会を重ねていく経験は素晴らしい。待ちが子供の力を育んでいる。
- 活動内容がわかった
- 菜の花ダイニングもフリースペースたまりばもどちらのご講演者の実際永い間やって来た事、事実を具体的に語って下さりお二人が本当にパワフルであり偉ぶる事無く、自然体でいらっしゃる事が快ちよいです。

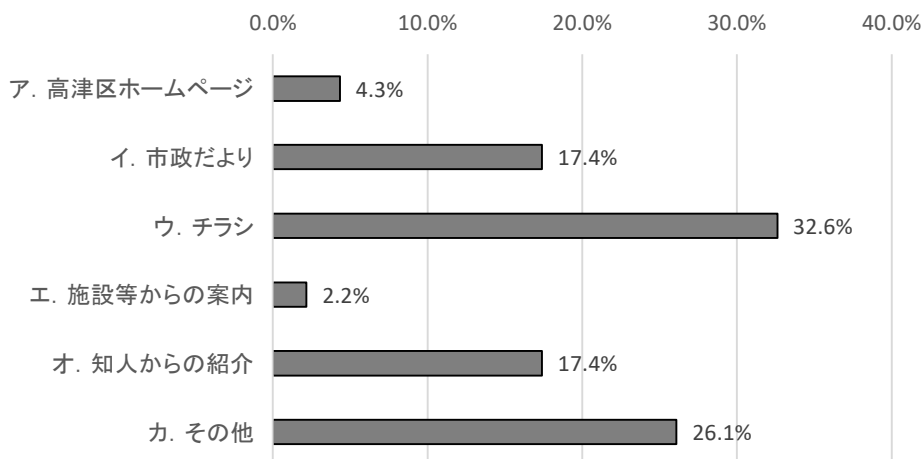
②あなたは、本日の講演会を通じて、地域の居場所についての理解が深まりましたか。

- ア. 理解できた イ. どちらともいえない ウ. 理解できなかった



③今回の講演会の開催を何で知りましたか。（複数選択可）

- ア. 高津区ホームページ イ. 市政だより ウ. チラシ（場所 ）
 エ. 施設等からの案内 オ. 知人からの紹介 カ. その他（ ）



<「ウ. チラシ」を得た場所>

- 多摩市民館 市民プラザ 区役所（4） プラザ橋 川崎市役所 こ
 まち
 図書館 ？

<「カ. その他」の内容>

- 封書できました
- 封書で送られてきた。
- 地域ケアからの案内
- 区役所からのお手紙
- FB
- 民児協
- 町会ライン
- 前週の公園体操、リーダー交流集会でチラシを見て
- 民生委員部会
- 区役所の方よりのご連絡頂いた

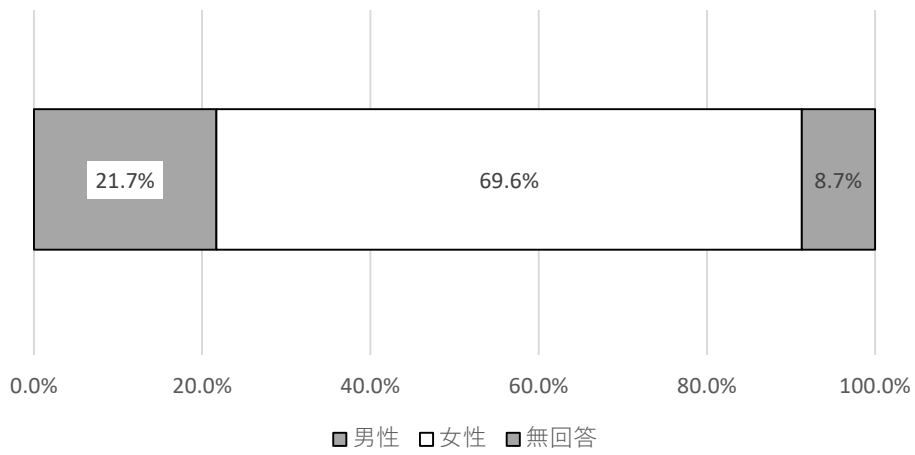
④全体を通じてのご意見やご感想があれば、ご自由にお書きください。

- 生活には満足している。子ども達にかかわりたくとも、高齢者になって見守ることは出来るから今後も変わらず聞いたりしたい。
- 不動産の利用の方法のひとつとして参考になりました。安定した運営をするための方法を考える機会が必要かと思いました。
- 大人も子どもも居場所は必要ですね。(サードプレイス)
- 幸せな大人の中で子供が安心してらせるという言葉が心に入りました。
- こども食堂のさとうさんの生き方がすてきです。(自分は皆に生かされている)なんて、すごいです。
- こども食堂が全国(神奈川)にこんなたくさんある事を知り、月1回でも良いからとりくめることも知り、無理なく実践できると思いました。
- 「生きるだけで祝福される」は素晴らしい言葉です。子供も大人も生きることの大切さを学ぶ居場所があって、幸福度が世界一の日本になれば良いと思います。
- とても有意義な時間でした。居場所に関心のある方が、多くいること、すごい!と思いました。
- ひとりだったり、困っていたとしても、こども食堂の場所、「居場所」等、いろんな人への周知がすごく大切だと思うので、市政だよりはもちろん、知ってもらうことの工夫がなにかあればいいなと思いました。
- 詳しくいろいろな話が聞くことができ良かったです。ありがとうございました。
- 「まず、自分が楽しむ」ネットワーク(つながりのコウチクの中心になればと思いました)
- やれることをやれる人が誰かとできたらと思います。助けてといえるところつながるなんて思いませんでした。
- 地域の中でたくさんの居場所ができたらいいな、作っていきいたいなと思いました。
- コミュニティカフェを将来出来たら良いと思う若い人の夢を聞いていて、役に立てたらと思い参加しました。
- 町会長が理解ないのでどうしたらよいか?
- とんでもなく大変な事を続けていらっしゃるお3人の方達の気持ちの根底、親に恩返しだったり、それぞれ出会いを物にして、ご自分たちの経験を経験を積んでいる素晴らしさ、とにかく真面目に一生懸命活動していて素晴らしいと思いました。(同時に自分が恥ずかしくなりました)

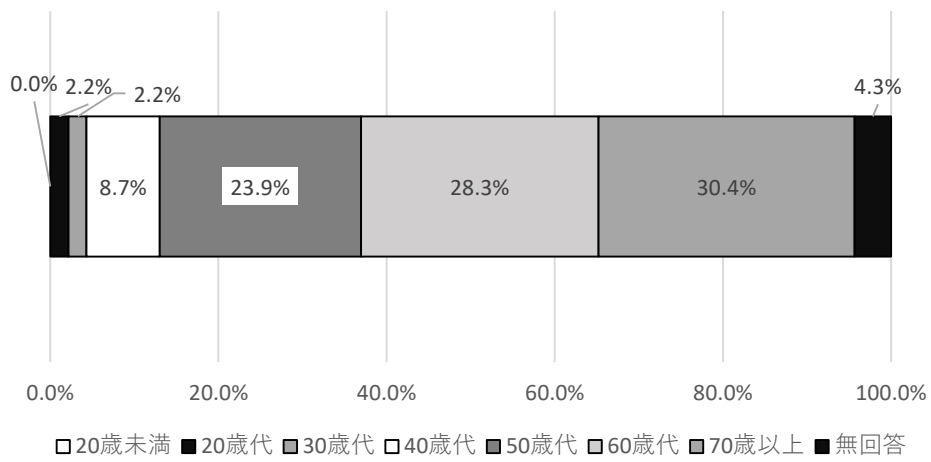
⑤今後聞いてみたい講演内容がありましたら、ご自由にお書きください。

- 後見人制度
- 高齢者の居場所について、カフェなどの体験を聞きたい
- 子供や子育て支援は大切ですが、高齢者に対するボランティア活動(NPOでも良いのですが)の実態を知りたいです。
- 質問の最後にあったように、小さな子どもと高齢者のマッチングのお話がすすむといいなと思っています。
- 異世代交流のある居場所づくりのコツやツールなど
- 理解ない町会長(を対象とした)の教育を目的とした講演。素晴らしい町会会館があるのに貸し会館になっている。町会住民は使っていない。
- あまりにたくさんの事をやって来ていらっしゃる人だからこそ、充実した内容をお聞きできましたが、まだ時間が足りない気がしました。もっともっとうろろお聞きしたいと思う魅力的なお3人でした。本当にありがとうございました。

⑦性別



⑧年代



4. 資料編

(1) 報告スライド

①「野川のえんがわ こまち」の代表理事の梶川朋氏スライド

The image displays a vertical sequence of 12 presentation slides for 'comarch'. The slides are arranged in two columns of six. The left column contains the following slides: 1. Title slide: '高津区地域包括ケアシステム講演会 地域の居場所が必要なワケ' (2024年3月16日(土) comarch. 野川のえんがわこまち 代表理事 梶川 朋). 2. 'comarch の 活動内容' (Activities): ① まちのえんがわ事業 (野川のえんがわこまち), ② 支え合いサービス事業 (通称:こまちア), ③ まち育て事業. 3. 'comarch の 社会ビジョン' (Social Vision): ★多様な居場所に満ちたまちへ. 4. 'comarch の 社会ビジョン' (Social Vision): ★誰にも活躍の場があるまちへ. 5. '自己紹介' (Self-introduction): 梶川 朋 (かじかわ とも) 1988年生まれ. 6. '自己紹介' (Self-introduction): 梶川 朋 (かじかわ とも) 1988年生まれ. The right column contains the following slides: 1. 'comarch について' (About comarch): ミッション, 設立, スタッフ. 2. 'comarch の 社会ビジョン' (Social Vision): ★誰もが共に生きられるまちへ. 3. 'comarch の 社会ビジョン' (Social Vision): ★誰にも活躍の場があるまちへ. 4. '自己紹介' (Self-introduction): 梶川 朋 (かじかわ とも) 1988年生まれ. 5. '自己紹介' (Self-introduction): 梶川 朋 (かじかわ とも) 1988年生まれ. 6. '自己紹介' (Self-introduction): 梶川 朋 (かじかわ とも) 1988年生まれ. The slides feature a mix of text, bullet points, and small photographs of staff and community members.

2019年5月から半年ほどかけ空き家の片づけと改修

2020年6月15日
コロナ禍でひっそりとオープン



野川のえんがわ こまち について

- ・ **コンセプト：**
あかちゃんを連れてママさん/パパさん、学校帰りのこどもたち（学校に通っていないこどもも）、ご年配の方々…何歳でも、障害があってもなくても、誰でもいつでもふらりと立ち寄れる「まちの縁側」を目指しています。
- ・ **場所：** 西野川2-31-1（こまえ正吉苑さん近く）
- ・ **開所日：** 月・水・金（10:00-17:00） + 土日どちらか（-16:00）
※週1回程度17:00-20:00を「中高生若者タイム」として10-20代に開放。



comarch の 活動内容

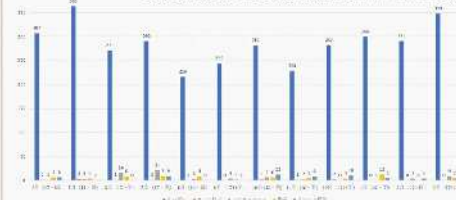
- ① **まちのえんがわ事業（野川のえんがわこまち）**
➢ 空き家を活用した多世代交流の小さな拠点
- ② **支え合いサービス事業（通称：こまちア）**
➢ 市民の支え合いによる日常生活のお手伝い
- ③ **まち育て事業**
➢ 市民のつながりを育む社会教育活動



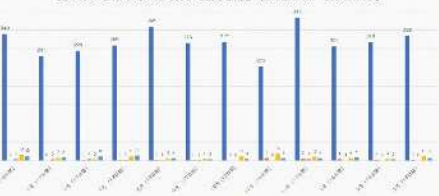
野川のえんがわ こまち 利用状況 (2020.6-2021.3)



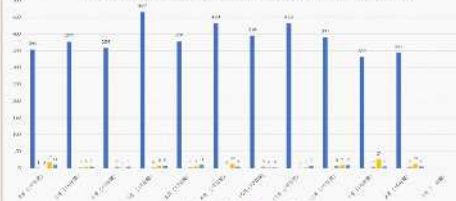
野川のえんがわ こまち 利用状況 (2021.4-2022.3)



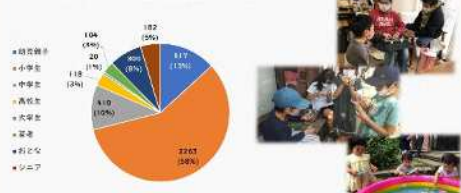
野川のえんがわ こまち 利用状況 (2022.4-2023.3)



野川のえんがわ こまち 利用状況 (2023.4-2024.2)



野川のえんがわ こまち 属性別利用者数 (R5.4月-R6.1月)



comarch の 活動内容

- ① **まちのえんがわ事業（野川のえんがわこまち）**
➢ 空き家を活用した多世代交流の小さな拠点
- ② **支え合いサービス事業（通称：こまちア）**
➢ 市民の支え合いによる日常生活のお手伝い
- ③ **まち育て事業**
➢ 市民のつながりを育む社会教育活動



支え合いサービス



- 市民による対象を限定しない
支え合いサービス（通称：**こまチア**）
〔こまチア 利用状況（2023年4月～2023年12月）〕
延べ900件
- 訪問型サービスB
（介護保険制度内の住民主体サービス）
 - ・体調不良時の一時的な買い物代行
 - ・電話・遠く居の確保などヘルパーのできない家事
 - ・電話・着せ替えの交換から団地の管理員交換まで
 - ・悪い猫大づみの愛びなし
- ファミリーサポートセンター
サポート会員としてのこどもの預かり
 - ・足の不入り、車取り
 - ・通学準備から送迎までのコンサートの同行まで
 - ・スマホの買い替えやデータ移行への担任
 - ・ひとり暮らしの送迎や家事援助 など

地域の居場所が必要なワケ



サード・プレイス（地域の居場所）

||

受容的空間（アジール＝隠れ家）

+

社会的空間（一歩踏み出すきっかけの場）

岡比留久美（2012）

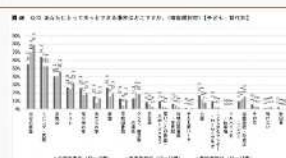
狛江のこどもたちのほっとできる「居場所」

—子ども市民調査（R5.1月実施）から—

居場所	割合	件数
1 公園	28.8%	100
2 児童館	23.2%	80
3 図書館	18.5%	63
4 公民館	15.2%	52
5 学校	12.1%	41
6 児童相談所	10.3%	35
7 体育館	8.7%	30
8 児童センター	7.9%	27
9 児童発達支援センター	6.8%	23
10 児童相談所（相談室）	5.9%	20
11 児童相談所（相談室）	5.1%	17
12 児童相談所（相談室）	4.3%	15
13 児童相談所（相談室）	3.5%	12
14 児童相談所（相談室）	2.7%	9
15 児童相談所（相談室）	1.9%	6
16 児童相談所（相談室）	1.1%	4
17 児童相談所（相談室）	0.3%	1
18 児童相談所（相談室）	0.3%	1
19 児童相談所（相談室）	0.3%	1
20 児童相談所（相談室）	0.3%	1

川崎のこどもたちの「ホッとできる場所」

—川崎市子どもの権利に関する実態・意識調査（R4実施）から—




こどもの約3人に1人は、
・・・「自宅」を居場所と感じられていない

こどもの約4人に3人は、
・・・「学校」を居場所と感じられていない

⇒「家庭」と「学校」（職場）が居場所となるに越したことはないが、居場所には選択肢が必要。

地域の居場所を考えるポイント①

—さまざまなカタチの居場所があること—



「自由」とは、生活・人生における選択枝の広さのこと。

アマルティア・コン

地域の居場所を考えるポイント②

—居場所は誰かとつながり頼れる場であること—



「自立」とは、誰にも依存しないことではなく、
依存先（頼れる人）を増やすこと。

新谷 重一郎

いくつかの調査からも、地域の居場所の必要性がわかります。

- 「安心できる場所」の数が多くほど、
子どもの自己肯定感や幸福が高い。
（内閣府：子ども・若者の意識と生活に関する調査）
- 「サードプレイス」を持つおとなのほうが、
持たないおとなよりも幸福度が有意に高い。
（香取ら（2021）：地域とコロナ前後の比較によるサードプレイスと幸福度の関係性の研究）


居場所には、広くひらかれた場から、特定の対象に限定した場まで幅広い種類があり、大切なのは一人ひとりが自分に必要な居場所を見つけられること。

（こども家庭庁：こどもの居場所づくりに関する調査研究報告書）

ユニバーサル対応メニュー	対象 (エリア)	依頼 (エリア)
	<p>エピソードのユニバーサルメニュー、全てのサービスセンターを対象とする依頼等</p> <p>児童館、公民館、図書館、放課後児童クラブ、 放課後子供教室、子ども会、スポーツ少年団、 公園や校庭、プレーパーク等の外遊び、 ユースセンター/青少年相談室</p>	オンラインでの相談支援等
	<p>児童館、公民館、公民館等</p> <p>プレイスペース、こども食堂、 校内外、学童・生活支援の場</p>	オンラインの居場所
	<p>児童館/プレイパーク、児童館/こども食堂/児童館生活支援センター(児童館/相談室) など児童館等</p> <p>放課後子供教室</p> <p>児童センター、児童館/児童館生活支援センター、児童館生活支援センター(児童館/相談室) など児童館等</p> <p>放課後子供教室、児童館/児童館生活支援センター、児童館生活支援センター(児童館/相談室) など児童館等</p>	オンラインの居場所 (オンライン相談支援等)


ターゲット/ハイブリッド

手づくりの居場所をととして、
居場所づくりは連鎖します。



一人ひとりの手で、地域に手づくりの
小さな居場所を増やしていきましょう！

ご清聴ありがとうございました。



柳田あゆみ氏 ことば
コーディネーター

②菜の花ダイニング 佐藤由加里氏スライド

地域の居場所が
必要なわけ

こども食堂 菜の花ダイニング

2024年3月16日(土)
於：高津区役所



子ども食堂って なんですか？

こどもが一人でも安心して、
無料または低額で食事ができる場所
こどもだけでなく、あらゆる世代の方が参加できます

菜の花ダイニングは、こどもがひとりでごはんを食べる
「こしよく」を少しでも減らしたい・・・
という思いから2017年5月から始まった
「子ども食堂」を運営する団体です

2024年3月16日 菜の花ダイニング

子ども食堂の種類？

子どもが中心 → 子ども食堂
地域の人 → 地域食堂
年齢に関係ない → 多世代食堂

≡ こども食堂

2024年3月16日 菜の花ダイニング

子ども食堂は誰の***？

2024年3月16日 菜の花ダイニング

子ども食堂は 誰のため？

対象 子どもと保護者、地域の方々
属性にとわれない

- * 年齢・国籍・性別 も様々
- * その地域に合わせた活動

*子どもの居場所
→ 学習支援・あそび場、居場所

*地域へのつながり
→ 地域食堂 等の名称も使用
ボランティアとしての活躍の場

2024年3月16日

こいのぼりデザイン

5

こども食堂の***

運営者

- * 地域の方
- * NPO法人
- * 飲食店
- * 社会福祉法人
- * 宗教法人
- * 企業 等

開催日時

開催時間 昼・夜
開催曜日 月曜から日曜迄
開催場所 市民館
飲食店
法人施設
教会 お寺
町内会館等
法人の施設
コミュニティカフェ
等

2024年3月16日

こいのぼりデザイン

6

連携先

- * 高津区地域まもり支援センター
- * かわさきこども食堂ネットワーク
- * 公益財団法人かわさき市民活動センター
- * 市民館
- * 保育園・幼稚園
- * 子ども文化センター
- * 川崎市母子・父子福祉センター
- * 高津区社協
- * 地域包括支援センター
- * 神奈川こども食堂・地域食堂ネットワーク
- * 一般社団法人全国食支援活動協会
- * NPO法人全国こども食堂支援センター むすびえ



2024年3月16日

こいのぼりデザイン

7

どのように運営していますか？

① メンバー：ボランティア

- * 10代～60代
- * メンバーの保有資格等：調理師・栄養士・保育士 等
- * 高校生・大学生・社会人・主婦等

② 運営経費

- *助成金 *参加費
- *寄付：寄付金 お米 消耗品 お菓子等



2024年3月16日

こいのぼりデザイン

8

調理の様子



2024年3月16日

こいのぼりデザイン

9

まちのひろばに 子ども食堂はあるの？



2024年3月16日

こいのぼりデザイン

12

居場所としての子ども食堂

2024年3月16日

こいのぼりデザイン

11

③NPO 法人フリースペースたまりば 友兼大輔氏スライド



川崎市子ども夢パーク
フリースペースえんの取り組み

認定NPO法人フリースペースたまりば
川崎市子ども夢パーク野良
友兼 大輔



since
2003

JR南武線津田山駅
徒歩5分

「川崎市子どもの
権利に関する条例」
(2006年12月制定)

具現化を目指した
青少年教育施設
(2003年7月オープン)



冒険遊び場
プレーパーク

プレーパーク
水



プレーパーク
ドロ



不登校児童生徒の
居場所

「フリースペース
えん」

障がいや非行の有無は問われない

利用料は無料。

【基本理念】

自己肯定感を育む居場所づくり

「生きている」ただそれだけで
祝福される

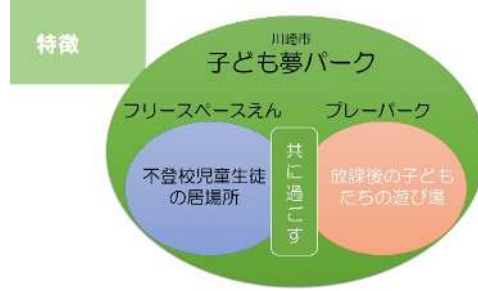
そんな場をみんなでつくって
いきたいと考えています。

みんなで
作って
食べる





「地域に支えられる居場所」
地域ネットワークの構築、ボランティアの活用



子どもの「いのち」を
まん中に

(2) 広報用チラシ

※2000 枚印刷

高津区地域包括ケアシステム講演会（キラリ事業）

Colors Future! KAWASAKI 100th 川崎市

COLORS FUTURE! ACTIONS KAWASAKI 100th

Green For All KAWASAKI 2024

地域の居場所が必要なワケ

参加費 無料



令和6年
3月16日 土
14:00～16:00 (13:30開場)

会場 高津区役所 1階保健ホール

対象 地域で活動されている方、
地域活動に関心のある方

定員 50名 (当日先着順)

主催 高津区役所

●プログラム

講演 comarch 代表理事 梶川 朋氏
東京都狛江市で築約50年の民家を活用した、
こどもから高齢者まで誰でも立ち寄れる多世
代交流の場、「野川のえんがわこまち」を運営。



トークセッション
高津区内で活動する団体の事例紹介や意見
交換などを予定しております。
(参加団体)
菜の花ダイニング 佐藤 由加里氏
フリースペースえん 友兼 大輔氏
(認定NPO法人 フリースペースたまりば)

申込方法 申込不要。当日直接会場にお越しください。

問合せ先 高津区役所地域ケア推進課

電話 044-861-3313 **FAX** 044-861-3307 **メール** 67keasui@city.kawasaki.jp



← 高津区地域福祉活動キラリ事業ホームページ「たかつハートリレー」
<https://www.city.kawasaki.jp/tokatsu/cmsfiles/contents/0000035/35874/index.html>



(3) 会場案内

※高津区役所入口や地域みまもり支援センター入口から会場である保健ホールまで案内した。





高津区地域包括ケアシステム講演会（キラリ事業）

地域の居場所が必要なワケ

報告書

令和6年3月 川崎市高津区